❶

❷

裕仁親王の欧州外遊

第一次世界大戦は、世界の勢力図を一変させる大事件でした。西欧世界は長く続いた戦争で荒廃し、世界に覇を唱えていたはずの英国の力は急速に失われ、一方でアメリカの影響力が大きくなりました。

日本においては、遠い西欧の戦争による損害はほとんど無く、むしろ産業発展の契機になりましたが、激変する世界の中でどのように地歩を築いていくかが重要な課題として示されました。また、戦争によってドイツやオーストリア、ロシア、トルコといった「帝国」が崩壊したことは、天皇制による近代化を進めてきた日本に大きな衝撃を与えました。この頃、大正天皇の体調は悪化の兆しを見せ始め、国民にもその様子は噂となって伝わりました。元老、政治家たちは皇室および国家の前途を心配し、皇太子裕仁親王への期待感を高めました。そして、次代の天皇となる裕仁親王に、世界基準の見識を身に付けさせることを目的とした外遊計画が山県有朋や原敬首相らによって発案されました。大正10年(1921) 3月から約半年の外遊が始まりました。

裕仁親王は横浜を出港後、香港、シンガポール、コロンボなど英国植民地に寄港しながら英国に着くと、ポーツマスに上陸、列車でロンドンに至り英国王ジョージ5世と馬車に同乗してバッキンガム宮殿に入りました。そしてロンドン各地、オックスフォード大学、スコットランドなどを巡遊し、さらにフランス、オランダ、イタリアを歴訪の後に帰国します。

西欧列国の王室との交流を深め、また大戦後の西欧世界に触れたことで人間的に大きく成長した裕仁親王は帰国後の11月、摂政に就任しました。

この外遊は国内で大きな注目を集めました。新聞各社の写真班・活動写真班の同行が許可され、外遊の様子は密着取材という形で写真や映画となり、広く国民が目にするところとなりました。この時の写真は、当然ながら絵葉書となりました。皇室関係の絵葉書にはカラー印刷、エンボス加工など豪華なものが多いのですが、今回の外遊を写した絵葉書も、華やかな意匠で彩られたものばかりです。そして何より、裕仁親王の自然な振る舞いが鮮明な写真となって流布したことは、国民の皇室に対する親近感を喚起するとともに、皇室の権威を再認識させる契機となりました。

大正文化

「大正」と聞いてまずイメージするのは、デモクラシー、あるいはモダンな民衆の文化ではないでしょうか。この二つのイメージは密接に結びついて、大正文化を形成しました。明治の末から演劇や映画が流行し、また日本橋にはデパートが登場しました。都市の人々が謳歌した新時代の様相は「今日は帝劇、明日は三越」という言葉に集約されています。

こうした華やかな大正時代のイメージは絵葉書からも読み取ることができます。豊富な商品が描かれた三越の宣伝絵葉書、「文化住宅」と呼ばれる売り建ての洋風一軒家、ラジオの放送局や飛行機を写した絵葉書などは、大正期の新たな文化に対する人々の憧れを表しています。

❸

❶ 大正10年　御同乗ノ英帝陛下ト東宮殿下(個人蔵)
❷ 大正10年　東宮殿下御帰朝紀念［渡欧順路地図］
❸ 大正期　飯澤天羊「御細君閣下」
❹ 大正12年　浅草公園十二階附近の惨状
❺ 大正12年　本所被服廠跡の三万二千の焼死体の山
❻ 昭和2年　大正天皇御大葬儀 御霊轜宮城二重橋出御新宿葬場殿に向はせらる

また、夫を尻に敷く妻の姿がユーモラスに描かれた絵葉書は大正時代に特徴的なものです。大正期における女性の地位向上を反映して、ここに登場する夫たちは頼りなく描かれていますが、こうした家事の分業によって案外円満な家庭が築かれていたのかもしれません。

これらの文化は「大正」の終りによって終焉をむかえるわけではなく、新たな時代である昭和に至ってさらに豊かなものとなっていきます。

関東大震災

大正12年(1923) 9月1日、相模湾を震源とするM7.9の地震が関東一円を襲いました。死者・行方不明者約10万人、重軽傷者約5万人に及んだ関東大震災です。

この未曾有の震災の様子は、直後に絵葉書となって瞬く間に各地に広まりました。当時の絵葉書を見ると、まだ煙を上げた建物や、壊滅した地域からの避難民が被写体となっており、発生直後に撮影された写真の多いことに気付きます。また、およそ絵葉書の題材としては適当でない、焼死体や怪我人が被写体になっていることもわかります。こうした、災害を写し撮った絵葉書は「使うもの」ではありませんでした。東京では新聞社が壊滅したため、新聞の発行は停止しており、編集や製本の必要ない、最も速報性のある「メディア」として絵葉書は活用されたのです。

報道のため被災地に入ったカメラマンは、被災民たちから冷たい視線で見られ、「写真を撮っている暇があるなら救助に参加しろ」と批判の対象となったそうです。しかし、大津波の襲来や巨大地震の再来、あるいは「朝鮮人」に関する流言蜚語が拡散する中で、唯一真実を伝えたのが写真であったこともまた事実です。有り合わせの紙に印刷した粗悪な絵葉書があることで、現代の私たちは関東大震災が発生した直後の様子を生々しく知ることができます。また、明治から震災以前にかけて形成された東京が震災によっていかに大きな変容を余儀なくされたのかを視覚的に認識することができます。

❹

❺

大正天皇崩御

大正天皇は幼少の頃から病弱でした。成年した後は心身ともに壮健となり、日本全国を巡啓した時期もありましたが、即位後の大正9年(1920)頃から体調が悪化しはじめました。数年間の療養生活の後、大正天皇は大正15年(1926) 12月25日、葉山御用邸で崩御しました。48歳でした。

昭和2年(1927) 2月、大正天皇の大葬が執り行われました。轜車(天皇の霊柩を運ぶ車)は午後6時に皇居を発し、約2時間半をかけ新宿御苑の葬場殿に向かいました。長さ6キロ、約6000人の行列はさながら古典絵巻を見るようでした。新宿御苑での儀式の後、霊柩が東京府南多摩郡浅川町(現八王子市長房町)に造営された陵に納められると大葬は終了しました。

この間、新聞、絵葉書、そして新たなメディアであるラジオによって天皇の容態は全国に伝えられていました。天皇が崩御すると新聞各社は号外を出しましたが、新しい元号を「光文」と誤報する一幕もありました。

明治天皇の大葬の時とは異なり、葬場殿への一般国民の参拝とメディア取材が許可され、多くの写真が残されています。

(リサーチアシスタント 長谷川怜)

❻